

●2本目のキャンドルに火が灯りました。今年、伊丹教会では紫色のアドベントキャンドルを用いています。この「紫」には「悔い改め」の意味があり、自らの歩みを振り返るという意味が込められています。この時期、世間ではクリスマスに向けて街も徐々に明るさを増していきますが、教会のクリスマスまでの備えの時はそれとは全く逆で、少しずつ自分の罪を顧み、私たちの心と社会の暗闇に目を向け歩んで行くのです。その歩みがあってこそイエス・キリストの救いの光、希望の言葉は深く私たちに届くのです。

●イエス様は故郷ナザレのユダヤ人の会堂で「救い主の到来」を告げるイザヤ書の言葉を朗読され、「この聖書の言葉は、今日、あなた方が耳にしたとき、実現した」と語られました。ナザレの人々の中にはその恵み深い言葉を聞いて、イエス様を褒め讃えた人々もありましたが、昔からイエスの事を知っていた人々の多くはイエスにつまづきました。

ルカはイエス様の言葉を「神様からの語り掛け」だと受け止めるということは本当に難しい事であり、それこそが神の働きなのだということを教えているのです。

私たちも聖書を通して、イエス様の愛や慰めを深く受け止めることができる時もあれば、全くそれが心に響かないという時があります。そして往々にして自らが苦しみや、罪深さを覚える時、また人の困難に深く寄り添うような暗闇の中でイエス様の声が私たちの耳に響いてくるのだと思います。

●政治学者でクリスチャンの姜尚中さんは、最愛の息子の死という悲劇に見舞われた絶望の時に母親の声が耳元で囁くかのように蘇ってきたのだと語っておられます。その母親の言葉には聖書の言葉に似たものがいくつもあります。姜尚中さんは還暦を過ぎられた今、昔に聞いた母親の言葉と聖書の言葉が重なるようにして、耳元で温かく囁くのを聞き、その人生の歩みを支えられている事を「母の教え」というご自身の本に記しておられます。

●イエス様の慰め深い言葉は、きっとナザレの人々や弟子たちの耳元にも、後に深い苦しみや嘆きの中に置かれた時に、神からの語りかけとして蘇り、響くようなことがあったのではないかと思います。

そのように私たちも厳しい現実の只中で神の言葉、救いが実現したと感じる時が必ず与えられるのです。そのことを信じ、私たちはこのアドベントの時、自らと社会の闇に勇気を持って目を向け、共に静まって聖書の言葉に耳を傾け続けて参りましょう。